

# SCHEDULE

連日19:00より  
本編上映開始

12/11 (土) 『クローズ・アップ』 99分+レクチャー60分  
深田晃司(映画監督)

12/12 (日) 『マッチ工場の少女』 69分+トーク60分  
岨手由貴子(映画監督)×大江崇允(映画作家/脚本家)

12/13 (月) 『鳥の歌』 102分+トーク60分  
小田香(映画作家)×太田昌国(シネマテーク・インディアス)

12/14 (火) 『セールスマン』 91分+レクチャー60分  
想田和弘(映画作家)

12/15 (水) 『ピリディアナ』 92分+トーク60分  
広瀬奈々子(映画監督)×稲川方人(詩人/編集者)

12/16 (木) 『ある夏の記録』 90分+トーク60分  
小森はるか(映像作家)×月永理絵(エディター/ライター)

12/17 (金) 『イタリア旅行』 85分+トーク60分  
三宅唱(映画監督)×大川景子(映画編集)

## 開催劇場

東京都 ユーススペース 03-3461-0211	東京都 シネマネコ 0428-84-2636	神奈川県 シネマ・ジャック&ベティ 045-243-9800
群馬県 シネマテークたかさき 027-325-1744	宮城県 フォーラム仙台 022-728-7866	山形県 フォーラム山形 023-632-3220
愛知県 名古屋シネマテーク 052-733-3959	長野県 長野相生座・長野ロキシー 026-232-3016	新潟県 新潟・市民映画館シネウインド 025-243-5530
富山県 ほとり座 076-422-0821	大阪府 第七芸術劇場 06-6302-2073	大阪府 シネ・ヌーヴォ 06-6582-1416
兵庫県 元町映画館 078-366-2636	鳥取県 ジグシアター 085-231-1001	広島県 横川シネマ 082-231-1001
愛媛県 シネマルナティック 089-933-9240	福岡県 KBCシネマ1・2 092-751-4268	大分県 シネマ5 097-536-4512
		熊本県 Denkikan 096-352-2121
		沖縄県 桜坂劇場 098-860-9555

## 開催時期

2021年 12月11日(土)~12月17日(金)  
全国24館にて同時開催/連日19:00開映

\*連日19時より映画本編を上映します。余裕を持ってご来場ください。  
\*新型コロナウイルスの感染状況その他の影響により、プログラム、スケジュールに変更が生じる可能性があります。公式ホームページ、各開催劇場のホームページなどで、最新情報をご確認ください。

## 参加料金

各プログラム  
30歳以下:1,200円  
31歳以上:1,800円(全て税込)

\*一部劇場では、30歳以下を対象とした特別先行予約あり。

## A GUIDE TO CONTEMPORARY ART HOUSE



講座  
連続

# 現代アートハウス入門

ネオクラシックをめぐる七夜

| Vol.2 |

12/11 Sat 2021 12/17 Fri

企画・運営:東風 企画協力・提供:ユーススペース  
協力・提供:アイ・ヴィー・シー/アンステイチュ日本/グッチーズ・フリースクール/コミュニティシネマセンター/シネマテーク・インディアス/ノーム  
技術協力・予告篇制作:restafilms WEB制作:坂元純(月光堂) デザイン:loneliness books

AFF 文化庁「ARTS for the future」補助対象事業

www.arthouse-guide.jp fb.com/arthouseguide @arthouseguide @arthouseguide



# 現代アートハウス入門

## ネオクラシックをめぐる七夜

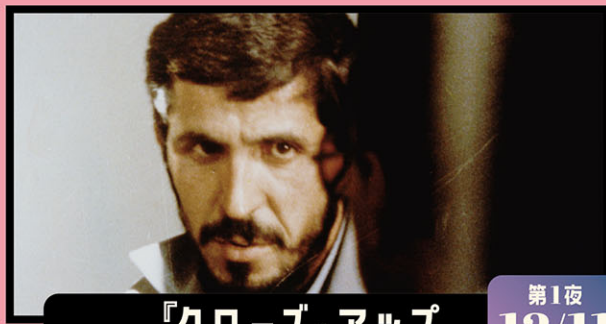
講座 連続

### Introduction

### アートハウスへようこそ

1970年代から今日まで続く日本の〈アートハウス〉は、“ミニシアター”という呼称で親しまれてきました。ここは世界中の映画と刺激をもとめる観客とが出会う場所。多様な映画体験によって、未来の映画作家だけでなく、さまざまなアーティストを育む文化的ピオトープとしての役割を担ってきました。上映されるのは、ただ楽しむための作品だけではありません。目を覆うほどプロテスクで、心をズタズタに引き裂く映画もあれば、ため息が出るほど美しい眼福の映画もあります。〈アートハウス〉の暗闇でスクリーンが反射する光を浴びることは、多かれ少なかれ——私たちの生き方を変えてしまう体験なのです。

連続講座「現代アートハウス入門」では、〈アートハウス〉の歴史を彩ってきた「ネオクラシック(新しい古典)」と呼ぶる作品を7夜連続日替わりで上映。気鋭の映画作家たちが講師として登壇し、各作品の魅力を解説。さらに、全国の参加者とのQ&Aを交えながら、これからの〈アートハウス〉についての知見を共有します。



## 『クローズ・アップ』

Nema-ye Nazdik

第1夜 12/11

監督・脚本・編集:アッバス・キアロスタミ 撮影:アリ・レザ・ザリンドスト 録音:モハammad・ハギギ、アフマッド・アサグリ  
出演:ホセイン・サブジアン、ハッサン・アフラズマンド、モフセン・マフマルバフ  
1990年 | イラン | 99分 | カラー © 1990 Farabi Cinema

失業者のサブジアンはバスで隣り合わせた裕福そうな婦人から読んでいた本について聞かれ、なりゆきから自分が著者で映画監督のマフマルバフだと思い偽ってしまう。婦人の家に招かれた彼は、映画の話をもてなすうちに、架空の映画製作の話にこの家族を巻き込み…。映画監督だと身分を偽り、詐欺で逮捕された青年の実話をもとに、再現映像とドキュメンタリーを交差させて描いた異色作。

レクチャー | 深田晃司 (映画監督)



アッバス・キアロスタミとモフセン・マフマルバフの傑作群は、まだ二十歳前後であった私をイラン映画に心酔させた。『クローズ・アップ』は中でも特に熱狂した一作で、映画の底なしの可能性をこの作品で感じて欲しい。

—— 深田晃司 (映画監督)



## 『マッチ工場の少女』

Tulitiktehtaan tyttö

第2夜 12/12

監督・脚本:アキ・カウリスマキ 撮影:ティモ・サルミネン  
出演:カティ・オウティネン、エリナ・サロ、エスコ・ニッカリ、ペサ・ビエリッコ、レイヨ・タイバレ  
1990年 | フィンランド | 69分 | カラー © THE MATCH FACTORY

マッチ工場で働くイリスは、母と義父を養っている。ある日、給料でドレスを衝動買ってしまった彼女は、義父に殴られ、母からドレスの返品を命じられる。ついに我慢できなくなった彼女は、家を飛び出しディスコで出会った男と一夜を共にするが、その男にも裏切られ…。何の返答もない娘のどん底の人生を淡々と描き、絶望的な状況になぜか笑いが込み上げてくるアキ・カウリスマキ映画の真骨頂ともいえる一作。

トーク | 岨手由貴子 (映画監督) × 大江崇允 (映画作家 / 脚本家)



「クラシック映画」と聞くと身構えてしまう人もいますが、それらは製作されてから何十年も、多くの人を魅了してきました。そんな映画の抗えない魅力、一緒に反芻していく時間になればと思っています。

—— 岨手由貴子 (映画監督)



## 『鳥の歌』

Para recibir el canto de los pájaros

第3夜 12/13

監督・脚本:ホルヘ・サンヒネス 撮影監督:ラウル・ロドリゲス、キジェル・モルイス 音楽:セルヒオ・ブルデンシオ  
出演:ジェラルディン・チャップリン、ホルヘ・オルティス 製作:ウカマウ集団  
1995年 | ボリビア | 102分 | カラー © GRUPO UKAMAU

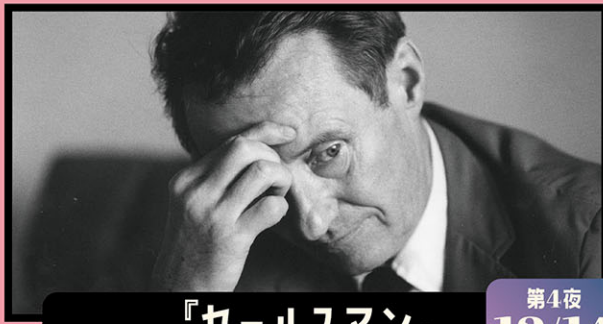
16世紀にアンデスを「征服」したスペイン遠征隊の行為を、批判的に描く映画を製作しようとした撮影隊が直面した現実とは? 撮影に訪れた先住民の村で「ここから出ていけ!」と詰め寄られた映画人たちは、やがて問題の本質に気づく。アンデス世界の価値観に基づく独自の映画言語でゴダールらにも衝撃を与えたボリビア・ウカマウ集団の代表作の一つ。ロカルノ国際映画祭「質と刷新」賞受賞。

トーク | 小田香 (映画作家) × 太田昌国 (シネマテーク・インディアス)



アートハウスはあやしげな場所に見えることもあるかもしれませんが、それ以上に妖しい映画がかかっています。鑑賞後はより健全に、より不健全に、もしくはその両方になるかもしれません。あの映画のここは好きであることは苦手など、誰かに言いたくなくて、伝わらなくて、その体験まで、心のどこかに残り発酵していく映画がかかっています。

—— 小田香 (映画作家)



## 『セールスマン』

Salesman

第4夜 12/14

監督:アルバート・メイズルス、デヴィッド・メイズルス、シャーロット・スワーリン 撮影:アルバート・メイズルス  
編集:デヴィッド・メイズルス、シャーロット・スワーリン 音楽:ディック・ウォレス  
1969年 | アメリカ | 91分 | モノクロ

ボストンからフロリダへ。聖書の訪問販売員たち4人の旅にカメラは密着する。彼らの販売対象はもっぱら教会の信者で、一人暮らしの未亡人や、難民、部屋代も払えない子持ち夫婦など。安いモーテル、煙るダイナー、郊外のリビングルーム、月賦払い…。物質主義的の夢と幻滅、高揚と倦怠が奇妙に交差するアメリカのポートレイト。ダイレクト・シネマのバイオニア、メイズルス兄弟のマスターピースを本邦初公開。

レクチャー | 想田和弘 (映画作家)



真っ白で空虚なスクリーンなのに、いや、真っ白で空虚なスクリーンだからこそ、いったい何が映し出されるのか、無限の可能性が存在しているんですね。なんだか不思議じゃないですか?!

—— 想田和弘 (映画作家)



## 『ビリディアナ』

Viridiana

第5夜 12/15

監督:ルイス・ブニュエル 脚本:ルイス・ブニュエル、フリオ・アレハンドロ 撮影:ホセ・フェルナンデス・アグアヨ  
編集:ペドロ・テル・レイ 出演:シルビア・ピナル、フェルナンド・レイ、フランシスコ・ラバル  
1961年 | メキシコ・スペイン | 92分 | モノクロ © 1991 Video Mercury Films

修道女を目指すビリディアナは、叔父の屋敷に呼び出される。叔父は亡き妻に似た彼女を引き止めようと嘘をつくが、それに気づいた彼女は家を去る。絶望した叔父は自殺。責任を感じた彼女は貧しい人々を屋敷に住まわせ世話しようとするが…。カンヌ国際映画祭パルム・ドール受賞の一方で、カトリック教会から大きな非難を浴び、本国スペインやイタリアで上映禁止に至った問題作。

トーク | 広瀬奈々子 (映画監督) × 稲川方人 (詩人 / 編集者)



ああ、そうか、自分はこの世界に対して、「ちょっと待った」を言いたかったのだと気づかされる映画がある。新しいものの見方を発見し、立ち止まって何度も考え、答えのない旅に出る。いい映画には共感や同調よりも、もっと豊かに驚きに満ちたものが、色褪せることなくたくさん詰まっている。

—— 広瀬奈々子 (映画監督)



## 『ある夏の記録』

Chronique d'un été

第6夜 12/16

監督:ジャン・ルシェ、エドガール・モラン 撮影:ミシェル・プロロー、ラウール・クタル  
出演:マルスリーヌ・ロリダン、ジャン・ピエール・セルジョン、ナタリーヌ・パロー  
1961年 | フランス | 90分 | モノクロ © DR

パリ、1960年、夏。街ゆく人々に軽量16ミリカメラと録音機が問いかける。あなたは幸せですか? あるいは、愛、仕事、余暇、人種問題について…。作り手と被写体とが制作プロセスを共有することで、映画が孕む作為性や政治性が明らかになり、リアルとフィクションの概念が問い直される。映画作家で人類学者のルーシュと、社会学者で哲学者のモランによるシネマ・ヴェリテの金字塔。

トーク | 小森はるか (映像作家) × 月永理絵 (エディター / ライター)



学生の頃に偶然観ていた映画が、数年経ってから、自分にとっての大切な一本だったと気付くことが増えました。途切れ途切れに蘇ってくる場面は、あの時わからなかった経験も、大事なものだと教えてくれました。

—— 小森はるか (映像作家)



## 『イタリア旅行』

Viaggio in Italia

第7夜 12/17

監督・脚本:ロベルト・ロッセリーニ 脚本:ヴィタリアーノ・ブランカーティ 撮影:エンツォ・セラフィン  
音楽:レンツォ・ロッセリーニ 出演:イングリッド・バーグマン、ジョージ・サンダース  
1954年 | イタリア・フランス | 85分 | モノクロ © Films Sans Frontières

結婚8年目、一見仲の良いカテリーナとアレックスは、実は破局寸前。ベズビオ火山、ポンペイの遺跡、カプリ島などをめぐりながら、二人は離婚へと突き進んでいくのだが…。ロッセリーニは、バーグマンとサンダースに即興的な演技を求め、生々しい感情のゆらぎをフィルムに焼き付けた。ゴダールに「男と女と一台の車とカメラがあれば映画は撮れる」と言わしめたネオ・レアリズムの大傑作。

トーク | 三宅唱 (映画監督) × 大川景子 (映画編集)



「人生は短すぎる」「だからこそ楽しまない」といつどこでなぜその言葉が発せられるのか。私はその場面においてなにを見ていただろう?

—— 三宅唱 (映画監督)

第1夜 「クローズ・アップ」  
第2夜 「マッチ工場の少女」  
第3夜 「鳥の歌」  
第4夜 「セールスマン」  
第5夜 「ビリディアナ」  
第6夜 「ある夏の記録」  
第7夜 「イタリア旅行」